平成23年(2011)
阿づまの光
7月号・Julio

五代教主作 灰釉茶盌 銘「姫金神」

題字 出口直日

通巻　第508号
発行　大本東京本部
東京本部長　松田行彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL(IP) 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

艱難の大なるあとは幸福の
めぐみの花の大なるが咲く

出口王仁三郎聖師

環境破壊、世の終末を憂う

東京本部長　松田行彦

本年一月の巻頭言で、「陽照り輝きだす辛卯を迎えました。（中略）来年は開教百二十年の佳節を迎えるためにも今年は大事な年であります。漢字一文字〝活〟〝喜〟を勝ち取りましょう。大和合『〇』の心で参りましょう」と結びました。

そして、今年は関東教区としては、首都圏宣教にうって一丸となり邁進あるのみと覚悟しての時、突如、三月十一日東日本大震災が発生。世界中が驚愕と恐怖の事態に陥りました。あれから四ヵ月近く経ちましたが、遅々として復興が進まず、将に地獄絵を見る思いです。特に被災地の皆さまの悲しみ、途方に暮れるお姿の映像には、かける言葉が見つかりません。

教団として、いち早く、教主さまのお言葉をいただき、被災死亡された人々の霊魂救済のための各祭典と、さらに連続する災害の鎮静・復興を祈願し、救援隊を現地に派遣し炊き出しはもちろん、片付けやお見舞い活動など、回数を重ねてまいりました。

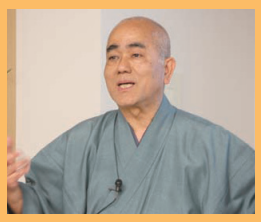
被災地の方々も、全国各地からの応援に、少しずつ気を取り直し、動き出したようであり、今後も長い期間をかけての救済活動が必要であります。

人類の知恵や学問、科学の粋を集めるこの二十一世紀において、自然の力の前には赤子同然、屁のつっぱりにもなりませんでした。一般論ですが、人間の傲慢さに決別し、素直さや思いやりの心を取り戻し、共生の中に生かされていることへの感謝、自分も何らかの報恩の仕事があることに気付かなければなりません。人類は将に存亡の岐路にあることを自覚し、人とは？　人生の本義とは？　神仏とは？　等々根本的問題を今一度深く見つめ直す時であると思います。

人類存亡を賭けた今世紀に生まれ合わせ、さらに大本信徒として、同じみ教えを共有する私たちは、今何を為すべきか？　どうあるべきか？　を教えられているのであります。サァ皆さん、勇気を持つて、明るい未来『地上天国』招来を目指して共に行動を起こしましょう。

第99回「21世紀、生きがい講座」より

日本人の誇りと使命



講師 出口眞人（でぐちまさと）
（社会福祉法人「愛善信光会」
『亀岡保育園』理事長）

自分の世界を広げるには

出口日出麿先生は、次のようにお示し下さっています。『認めただけが世界であり、肯定しただけが自分である。そして、自分がすなわち世界である』・・・・と。

私たちは普段、いろんなものを目にしながら、なかなか認めることが出来ずにいることがあります。まして目に見えないものになりますと、まるで気づくことができないでいることが、人生にはいくつもあります。

この部屋には黒板や蛍光灯、パソコン、プロジェクターなど、いろんな物があります。そして、水差しには喉を潤す働きがあり、机は資料を置くことができ、物書きが容易になる働きがあって、時計は時刻を示す働きがあります。そのことを認め、肯定することができたら、それは自分の世界のものとして広がります。しかし、気付くことも認めることもできなかったら、いつまでたっても自分の世界が広がらず、まったく自分のものにはならないという意味のお示しです。

特に、目に見えない霊的な世界については、「なるほど、そうなんだ！」との思いが次々にあれば、自分の世界はさらに広がりますが、「そんなバカな!?」「そんなことありえないでしょう!?」と疑っていたら、いつまでたっても広がることはできません。

またもう一つ申しますと、私たちが住む体的な世界と、霊的な世界との向上のためには、「疑うこと」と「信じること」によって、大きな違いが生じてきます。

体的な世界の例としては、今回の福島原子力発電所の事故がなぜ起きたのかというと、疑いが足りなかったのではないでしょうか？どこかで〝原発は安全なんだ〟と、信じきってしまったことが一つの要因だと思うのです。

昭和六十一（一九八六）年に起きた、スペースシャトル・チャレンジャー号の爆発事故も、〝事故が起きるかもしれない〟と疑うことがたりなかったんです。

それとは逆に、霊的な世界では信じることが大切です。例えば、大本の祭典では雌松に垂手（しで）をつけた玉串をお供えしますが、この雌松と垂手の意味を聞かれたら、「これは衣と材木（住居）を表しているんですよ」と教えるわけですが、「松の枝がなんで材木になるんだ？」「ただの紙がなんで衣なんだ？」と、疑いを持ってしまったら、この世界では成り立ちません。そこの違いをつかんでいただきたいと思います。

神心で動いていた日本

大神さまの目からご覧になれば、私たちはすべて「神の子・神の生宮」です。

また、日本について出口王仁三郎聖師は、『日本は真の高天原である。神のお集まりになるけっこうな御国である。世界の本（もと）となるべき国であるから、三千世界を救うところの誠の生神があらわれるのである』（「道の栞」）と、日本の国の尊さを示されているように、私たちの魂の奥底には、〝日本は尊い国だ！〟という自負が生き続けているのだと思うのです。

ギリシャで生まれた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）氏は、明治二十三（一八九〇）年に来日して英語教師のかたわら、日本の素晴らしいところをご覧になって、「知られざる日本の面影」など多数の著書を残されています。特に島根県松江の人たちが朝になったら、東から上がる太陽に向かって、パチパチと手を叩き拝んでいる姿を見て「こんなに信心深い国は、今までに世界中で見たことがない」と記されています。

また、平成十六（二〇〇四）年にノーベル平和賞を受賞したケニアの環境副大臣ワンガリ・マータイ氏は、日本を訪問された時に、Reuse（リユース）（再利用）とReduce（リデュース）（減少）とRecycle（リサイクル）（再資源化）とRepair（リペア）（修繕）の四つのRをまとめて、「もったいない」と言っていることを知り、飢餓をなくすためにはこの「もったいない」を世界に広げていかなくてはいけないという趣旨から、「もったいない運動」を始められました。

「ありがたい」「もったいない」「おかげさまで」「天地の冥加に尽きる」などの言葉も、先人たちは生活の中で自然に築いてこられたのではないかと思います。

出口直日三代教主は『四恩』という教えを説きました。『天の恩、土の恩、父母の恩、衆生の恩』。この四恩を日本人は生活の中で自然に身につけて生かしてきたと言えるのではないかと思います。

また聖師は、『日本の国に生まれたりといえども、行状なきものはとつくに人なり。日本の行状は神を第一とするにあり。日本は仁義をもって立てし国、大和魂（やまとだましい）をもって国の心とす。日本の精神を貫かんがためには、時によりては利益損害の問題を度外におきて活動せざるべからず。これぞ日本国の特殊の主義なり。日本は世界中を救くるの責任を有す。日本は神の御心を心として動くべき国なり』（「道の栞」）と示されていますが、元々日本人は、みんなが神さまを信仰していて、日常生活の中に、神さまが存在していたのです。そして神第一で物事を行い、仁義や大和魂を国の心として、また利益、損害は度外視して、神の御心を心として動いて、世界を救う働きを担うのが日本（人）なのです。

偉大な日本の先人たち

実際に、自分の立場を無にして、命がけで働いた日本人が、歴史を遡るとたくさんいらっしゃいます。

例えば、八田與一（はったよいち）氏は、明治十九年に石川県金沢で生まれ、東京帝国大学工学部卒業後、すぐに台湾総督府の土木局に勤務され、

五十六歳で亡くなるまで、全生涯を台湾のために尽くした方です。

当時の台湾は、毎年水害の被害を被っていて、そこで八田氏に「烏山頭ダムの建設工事をしてほしい」との依頼があり、大正九（一九二〇）年から昭和五（一九三〇）年まで、十一年の歳月をかけて、当時アジア一と言われた烏山頭ダムと、一万六千㌶に及ぶ気の遠くなるような規模の用水路を築かれました。

また八田氏は、ダム建設の業績はもとより、当時の土木作業員の生活改善にも、心血を注がれました。危険な現場に自ら一緒に足を踏み入れ、事故で作業員が亡くなられた場合には、日本人であろうと台湾人であろうと区別なく、非常に厚い心で尽くされたそうです。ですから、台湾の方にとって八田氏は神さまみたいな存在であり、今でも台湾の歴史教科書などには、その功績が詳しく紹介されていると言います。

また、第二次世界大戦中、リトアニアの日本領事館の領事代理をされていた、杉原千畝氏は、ナチスドイツの迫害によって、欧州各地から逃れてきたユダヤ人たちに対して、外務省からの訓令に反しながらも、大量の通過ビザを発給し、六千人もの方の命を救いました。何日間も寝ずにビザを発給したそうです。

外務省は長い間、杉原氏の偉業を無視していましたが、最近になってようやく、この行いが人道的に素晴らしいことだったと評価されるようになりました。

自分たちの損得を抜きにして、かつての日本人たちは世界に貢献しました。そんな素晴らしい精神が私たちの体の中にも、必ず流れていると思うのです。

魂の奥底にあるものを引き出す

これら私たち日本（人）の精神を創り上げた元というものは、穢れのない正しく素直な心であり、神道の教えである「惟神の道」とか、「大和魂・大和心」と呼ばれるものであったり、大本で教えられている、『四大主義（清潔主義・楽天主義・進展主義・統一主義）』や『四大綱領（祭・教・慣・造）』といったものが、日本（人）の心を築き上げてきたと言えるのです。

哲学者の梅原猛氏は、本年五月七日の「京都新聞」朝刊で、「今回の大震災は、近代人が共通に真理と考えている思想が、実は幻想に過ぎない神話ではなかったかという疑問を投げかける。自然は母の如くやさしいものであるが、父の如く怒り狂うことがあるものであり、それを奴隷として使うことは大変な誤謬ではなかろうか。とすれば、原発に依存することなしに果たして豊かで便利な現代の文明社会は可能かどうかという問いとともに、自然は果たして奴隷の如く、人間に唯々諾々と従うものであるかという問いが根本的に問われなければなるまい」と述べておられます。自然というものを〝科学技術で征服していける〟と思うことは誤りではないか？　と訴えておられるのです。

今後は自然のエネルギー「風力・地熱・太陽光」などが主として使用されるかもしれません。日本人の知恵に大いに期待したいと思っています。

この震災が、今の私たちの生き方、暮らしぶりを見つめ直す、考え直すきっかけを与えてくれたのではないかと思えるのです。

そのためにも、大本の教義、また日本古来からの教えにある、「潔斎」「鎮魂」「祈り」を実践していき、魂の奥底にあるものを表に引き出す。それこそが日本人の誇りであり、使命だと思うのです。

自分と自分自身に橋をかける

おそらく、私たちの体の中には、皇室に対する尊敬の念というようなものも、潜在的にあると思うのです。

数年前のことですが、こんなことがありました。東京の増上寺前の通りを行きましたら、車が全く走っていません。警官がポツポツと警備していたので「あ、これは何か重要な人が通るかもしれないな」と思い、待っておりましたら、目の前を走る車に美智子妃殿下が乗車されている姿が見えたのです。「あ、美智子さまだ…」と思っていたら、自然と頭を下げている自分に気が付いたのです（笑）。自分でもおかしくなりましたが、やはりそういう何かがあるのかなと思いました。

天皇皇后両陛下は、震災後しばらく行われていた計画停電の際には、節電のためにブレーカーを落として、ロウソクの灯りで食事をされたそうです。この姿が、我々の象徴たる皇室なのです。

また、平成十（一九九八）年の国際児童図書評議会の折に、美智子妃殿下は「橋をかける」というテーマでスピーチをされました。

「生まれて以来、人は自分と周囲との間に、一つ一つ橋をかけ、人とも、物とも、つながりを深め、これを自分の世界として生きています。この橋がかからなかったり、かけても橋としての機能を果たさなかったり、時として橋をかける意志を失った時、人は孤立し、平和を失います。この橋は外に向かうだけでなく、内にも向かい、自分と自分自身との間にも絶えずかけ続けられ、本当の自分を発見し、自己の確立をうながしていくように思います」…。

私が驚いたのは、「自分と自分自身との間に橋をかける」というお言葉です。

私たちは普段、感情や理性で動くことが多いですが、そのもう一方で、魂の奥底にいる「本守護神」としての本当の自分自身がいるのです。皆さんこのことをつかんでいただきたいのです。

感情の自分に翻弄されるのではなく、理性から、もう一つ内部の本性・魂の自分自身に橋をかけることが大切で、かつての日本人は、それを持っていたのです。

日本人の誇り、使命というのは、こういったところにあるのではないかな、と思えてなりません。

今回の震災で、世界の人たちは日本人の秩序正しさに、非常に関心を持っています。「これだけの災いが起こって、なぜ日本人は秩序正しくいられるのだ」と驚異の目で見られています。それは皆さんの中にある、日本人のすごさが現れているからだと思うと共に、私たちは日本人の誇りと使命を、身近なところから見つめ直して、本当の神さまのみ心に沿う生き方をさせていただかなければならないと思います。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・人類愛善会創立記念平和祈願祭・市杵島姫命例祭は六月十二日、午前十時三十分から、斎主・森良秀東京本部次長のもと執行され、三百七十人が参拝した。

祭員は東京主会、少年・少女祭員は同主会の涌井大嗣郎くんと土方清美さん、伶人は宮咲会関東支部、大本神諭拝読は朝倉泰群馬主会長、添釜は宇野社中の皆さんが担当した。

祭典後、松田行彦東京本部長があいさつに立ち、教主さまの台湾ご親教の報告と人類愛善会創立の歴史や意義を紹介。

鹿子木旦夫人類愛善会副会長

「出口王仁三郎人類愛善会初代総裁が目指した恒久平和・みろくの世実現に向けて、今後とも努力を続けていきたい」と力説した。

続いて、鹿子木旦夫人類愛善会副会長が「エルサレム歌祭への道」と題して同会創立記念講演を行った。

東光苑祭典・行事予定

7月

東光苑月次祭
10日（日）午前10時半
第101回「21世紀、生きがい講座」
講題 人はなぜ生まれたのか①
—霊界の実在
講師 尾崎泰良（管理局神苑部・大道場講師）
20日（水）午後7時～9時

8月

神集祭遥拝祭（初日・旧7月6日）
5日（金）夕拝時
瑞生大祭遥拝祭
7日（日）午前10時半
神集祭遥拝祭（最終日・旧7月12日）
11日（木）夕拝時
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
14日（日）午前10時半
第102回「21世紀、生きがい講座」
講題 人はなぜ生まれたのか②
—心豊かに暮らす四つの秘訣
講師 西永篤史（大本120年史編纂室次長）
17日（水）午後7時～9時

福島主会が震災鎮静・復興祈願と慰霊祭を執行

一日も早い鎮静と復興を祈願

福島主会では、五月二十九日午後十二時から、南相馬市原町区下渋佐字後川において、斎主・嶋貫光喜同主会祭務部長のもと「東日本大震災鎮静・復興祈願祭並びに犠牲者合同慰霊祭」を執行。福島主会の信徒をはじめ、松田行彦東京本部長、加部祥児大本総代会議長、関東教区の機関長ら三十六人が参拝した。

台風二号接近にともなう冷たい雨が降りしきるなか、地区全体が津波にのまれ、いまだ瓦礫の残る荒れ地に祭場を設けて祭典を執行。参拝者は余震と福島第一原子力発電所事故の鎮静と被災地の復興、そして犠牲となられた方々の霊界でのみ幸を真剣にお祈りした。

なお、祭典に先立ち、代表者五人が被害の大きかった相馬市松川浦地区に赴き、松田東京本部長の先達で「神言」を奏上。教主さまよりご下付された玉水と金明水を海に注ぎ、一日も早い鎮静と復興を祈念した。

第100回「21世紀、生きがい講座」

第一〇〇回『二十一世紀、生きがい講座』は六月十五日午後七時から九時まで、東京本部講座室において、斉藤泰教学研鑽室長を講師に「大本はなぜ生まれたのか」と題して開催された。参加者は二十三人（内、一般三人）。

講座では、大本の聖地や教祖、教主などの特色を紹介したほか、歴史や歴代教主さまの神業について解説。「大本は開祖が示された『初発の神諭』を、歴代教主のもと、具現化するところです」と説いた。参加者からは「大変興味深く、もっと〝大本〟のことを知りたいと思いました（三十七歳・一般・女性）」などの声が聞かれた。

関東教区少年夏期学級一覧

☼埼玉主会
期日 8月20日（土）
会場 東京本部
（台東区池之端2－1－44）
連絡先 高野 清
電話 090・5795・2296

☼茨城主会
期日 7月29日（金）～7月31日（日）
会場 つくば市六斗の森
（つくば市六斗1002番地）
連絡先 飯田俊郎
電話 0297・62・0501

☼千葉主会
期日 8月6日（土）～8月7日（日）
会場 大多喜古民家「中野屋」
（夷隅郡大多喜町小土呂197）
連絡先 秋山 広
電話 043・445・3065

☼東京主会
期日 7月16日（土）～18日（月・祝）
会場 伊奈キャンプ場（あきるの市伊奈）
連絡先 深津ミツ
電話 080・4345・3288

☼神奈川主会
期日 7月30日（土）～7月31日（日）
会場 丹沢湖キャンプサイト
（足柄上郡山北町玄倉490－2）
連絡先 長友芳之
電話 090・6170・6027

☆子どもたちの送り出しをお願いします